

『源氏物語』に於ける「うるはし」と梗概書

——『源氏物語』読書史のための覚書——

末沢明子

1

『源氏物語』がどのように読まれて来たか、その一端を梗概書を手がかりとして考えたい。どのように読まれて来たかという問いは享受史、研究史の問題になるが、これには二つの面がある。即ち、いかに評価されて来たかという問いと、いかなる形態で読まれて来たかという問いの二つである。無論、この二つは互いに重なるものではあるが、まずは後者を採り上げたい。後者の形態とは、音読か黙読かという問題、本文の書写の問題、更には注釈書、また、原文そのものを読むのか否かという問題など多くの面がある。原文によらないとは例えば梗概書があるが、それ以前に「原文」とはそもそも何かという問題があり、写本、版本、活字本、複製本などさまじく形態の「原文」があるのはいうまでもない。以下採り上げる事例には従来指摘のあったところと重なるものも少なくないが、形態を改めて問題としたい。

写本の時代、本文を書写することが読書の初めであったことはいうまでもないが、『紫式部日記』寛弘五年十一月の御冊子作りの記事に見える、局に「隠しおきたる」物語の本を道長が探し出して、内侍の督の殿、次姫子に与えてしまった出来事は、書写という手続きを省略した、道長なればこそ、いわば地位を利用した行為であったといえる。書物の入手が容易ではなかったことは、菅原孝標女などよく知られた例を見てもわかる。^(注1)書写の問題は必然的に本文の流布、異同の問題と係わるが、今こゝでは触れない。版本の時代になっても書写による読書が続けられてゆくことは無論で、現存する写本やさまざまの記録から知られる。音読か黙読かという問題は、これを広く読書の問題として考えれば、人類が黙読を始めた時を問うことにもなるが、『源氏物語』に関していえば、当初から音読、黙読両様があったといえる。音読は、

内裏のうへの、源氏の物語人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。
まことに才あるべし」と、のたまはせけるを^(注2)(紫式部日記208)

という一条天皇の場合を一つの例として、また、読み聞かせる女房、絵を見ながら聞く姫君という、物語音読論でいう形態は『源氏物語』自身の中にも見出すことができる(東屋巻)。また、『今鏡』村上源氏、「有栖川」の段に見える令子内親王御所での会話に見える

侍従大納言、三条の大臣など、まだ下臈におはせし時、月の明かりける夜、さまやつして、宮ばらを忍びて立ち聞き給ひけるに……北の方のつまなる局、妻戸たてたりければ、「月も見ぬにや」とおぼしけるに、うちに源氏読みて、「榊こそいみじかりけれ」「墓はしかあり」など聞こえけり。（下95）^{（注3）}

も音読である。物語一般に関してこのような例は多くある。音読にも幾種類があり、人に読ませて聞く上流階級の人物の読書、一冊の書物を数人で読もうとするときに一人が代表して音読する読書、字の読める者が読めない者に読んで聞かせる読書などが考えられる。『今鏡』の例は一冊の書物を共有しての読書であつて、作品自体が大部であることも一因だが、書物の入手が容易でないときの読書法といえる。「此物語を聞く人、まして読まん人は、すなはち観音の、三十二体をつくり、供養したるにも等しきなり」（小町草紙）のように、室町物語にしばしば見られる「読む」とは異なるだろう。「まして読まん人」は読んで聞かせる者を意味している。

一方、黙読は個人的な読書である。『更級日記』は「世の中に物語といふものものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ」と物語との係わりを記し始める。後に大納言の姫君と呼ぶ猫が現われる場面で「物語を読み起きて起きてゐたるに」とある一例を除いて、物語は常に「見る」ものとなっている。『紫式部日記』にも「こころみに、物語をとりて見れど、見しやうにもおぼえず（170）」とある。物語の読み方では「見る」と「読む」は区別されている。有名な俊成の「源氏見ざる歌読みは遺恨のことなり（六百番歌合）」にしても、三条西実隆が正月二日に初音巻を「覧」るのを「毎年の嘉例」とした（『実隆公記』文明十七年）^{（注4）}ことにしても、やはり物語は「見る」ものであった。物語の表現自体は語りの要素が色濃いにせよ、読書の一つの基本的な形態として「見る」こと即ち黙読があつたのではない。物語の第一の読者が女房が音読するのを絵を見ながら聞く上流の姫君か、菅原孝標女のような中流の女性なのか論ぜられて久しいが、最近では、物語には絵を伴うもの（絵物語・物語絵）と伴わないものがあり、それ

の読者が先の二通りの読者であったとの見解も出されている。^(注5) それによれば後者となる『源氏物語』も常に五十四帖を通して読むわけではなかったようだから、『今鏡』のようにある部分を「読む」のを聞くこともあったわけであるが、「読む」「見る」の区別は考えるべきだろう。この「見る」を「読みきかす意図なく、ぶつぶつつぶやき読みしたのである^(注6)」と考えると黙読とはいえなくなるが、「読む」との違いを問題にしておきたい。

「見る」読書はやがて注釈を生む。そこでもまた別の意味で「読む」ことが問題となる。

飛鳥井雅有が藤原為家のもとに通つて源氏の講釈を受けたのは文永六年九月、『嵯峨の通ひ』に

一七日、昼ほどに渡る。『源氏』はじめんとて、講師にとて女あるじを呼ばる。簾のうちにて読まる。まことに
おもしろし。世の常の人の読むには似ず、習ひあべかめり。「若紫」まで読まる。^(注7) (48)

とあるのは読むことがそのまま解釈となっていたことを示す。どこで区切るか、清濁いずれに読むかなどは古注釈にも見られる。声に出した読み方を文字化したものであり、写本に付された朱点等も同様の注記である。この講義は十一月二十七日で夢浮橋巻を終える。その内容は、この後に『古今集』を雅有が読むのを為家が訂し、為家所持本の点・声点を写し、難儀を尋ねたとあるのと通ずるものであろう。もう一つの「読む」読書である。

3

「読む」と「見る」の接点にあったのが講釈という行為と隣り合う古注釈であった。それに対して、梗概書は基本的に「見る」ものであったと考えられる。特定の目的・人物のために書かれたり、近世期は出版されたりという

梗概書は、人が「読む」のを聞く必要はない。古注釈も梗概書も原作そのままでは読むのが困難なところから生まれたものには違いないが、読者は縮小された原作を読むのだから、そこには当然、省かれたものがある。今、その縮小のされ方を末摘花をめぐる「うるはし」という語を通して考えたい。

末摘花と「うるはし」については既に宇治八宮をも含めて指摘があり、そこには確かにこの物語の、時代を見据える眼がある^(注8)。末摘花を特徴づける語であるが、『源氏物語』に於ける「うるはし」について先に一わたり見ておきたい。

『源氏物語』には、うるはし・うるはしかり・うるはしげ・物うるはし・うるはしだつ、以上の語で計七十二の用例がある。整った美しさを表わすともいえる中古語「うるはし」は作品により、その用い方に幅がある。『源氏物語』の用例を辿ると、儀式・作法に関してであったり、人間関係であったり、装束であったり、人物の態度であったりする。儀式・作法は例えば、「うるはしき儀式なれど、童のをかしきをなん、え思し棄てざりける(少女三・82)^(注9)」がある。六条院で秋好中宮から紫上へ花紅葉を箱の蓋に載せて贈る使者が童女であったというもの。贈り方も童女の「もてなしありさま」も作法に適っている、「好ましうをかし」きものであったが、中宮の儀式であれば、本来しかるべき女房による「うるはしき」ものである筈とされていることがわかる。人間関係としては、「御仲らひどもえうるはしからざりしかば、そのなごりにて(若菜上、四・20)」は女三宮の母女御と春宮母女御の、「年月経るままに、御仲いとうるはしく睦びきこえかはしたまひて(若菜下、四・166)」は紫上と女三宮の間柄を示す。これに「うちかしこまりて、かたみにうるはしだちたまへるも、いとよらなり(梅枝、三・418)」という螢宮と光源氏のふるまいを考えれば、単に仲がよいというのではない、公的ともいえる関係が読みとれる。装束等の外見は、伊勢下向の折の齋宮の「いとうつくしうおはするさまを、うるはしうしたてまつり(賢木、二・93)」の他、光源氏、大宮、夕霧、匂宮といった人々に対して用いられる。誰の視線が捉えたものかはともかく、対象となる人物には一定の傾向があ

り、それらを見れば、この語の性格が自ずと浮かんで来る。近江君に対して、「容貌はひちちかに、愛敬づきたるさまして、髪うるはしく、罪軽げなるを（常夏、三・243）」とするのは例外的といってよいが、それはまた、近江君の美しさとその人となりとの落差を示すものでもある。人物の態度などは、時にそれがうち解けない、融通がきかないといった負の意味合いを持たされることにもなる。葵上が光源氏としっくりしなかつたのは葵上の「うるはし」さゆえであつたとして、回想部分も含め、四例使われている。その子の夕霧には、外見をいう例もあるが、十一例、一人の人物としては最多の用例である。律儀な夕霧に似合う。葵上も夕霧も身分としてはごく上流である。その他の例を見ても、「うるはし」はそのような身分の人々に係わって用いられるのが『源氏物語』での傾向である。外見だけでなく、行動様式にも用いられるのも特徴である。帚木巻、雨夜の品定めで上流ならざる浮気女と男との合奏が「うるはし」とされるのは例外のように見えるが、それは左馬頭という中流の人物の捉えたものだったからである。

右のような傾向を確認した上で末摘花の例を考えたい。末摘花に関しては七例の「うるはし」があるが、それを梗概書がどう扱ったかを同時に見る。採り上げる梗概書は『源氏大鏡』、『源氏小鏡』、『源氏物語提要』、『十帖源氏』、『おさな源氏』、『源氏物語忍草』。本文は『源氏大鏡』、『源氏小鏡（光源氏一部連歌寄合之事）』（良基連歌論集二）、『十帖源氏』が古典文庫、『源氏物語提要』が源氏物語古注集成、『おさな源氏』は近代日本文学大系・仮名草子集（昭三、国民図書）、『源氏物語忍草』は勉強社文庫本による。『十帖源氏』『源氏物語忍草』は翻字、句濁を施した。本文の異同の大きなものもあるが、一つの例として考えるものである。

以下、節を改め、七例の「うるはし」について述べる。

1 御調度どもも、いと古代に馴れたるが昔様にてうるはしきを、なま物のゆる知らむと思へる人、さるもの要じて、わざとその人かの人にせさせたまへるとたづね聞きて案内するも、おのづからかかる貧しきあたりと思ひ悔りて言ひ来るを、……「見よと思ひたまひてこそしおかせたまひけめ。などてか軽々しき人の家の飾りとはなさむ。亡き人の御本意違はむがあらはれること」とのたまひて、さるわざはせさせたまはず。（蓬生、二・328）

明石から帰還した源氏に思い出されることもなく、いよ／＼貧しくなつてゆく末摘花が父祖伝来の立派な調度を手放すことなく、守っているさまだが、調度が「うるはし」と語られる。それは宮家ならではのものであつた筈だが、末摘花の現状とは落差が大きい。

梗概書でこゝで「うるはし」を用いるものはない。調度については『十帖源氏』『おさな源氏』のみが触れる。『源氏小鏡』はそも／＼が短いし、梗概以外にも目的であつたから触れなかつたともいえるが、調度の記事の有無は長さにはよらない。『源氏物語忍草』と『十帖源氏』の分量を比べてみると、末摘花巻では『源氏物語忍草』の方が若干長い。記事の違いは各梗概書が原作の何を残そうとしたかによるものである。残した結果は次のようになっている。

- ・御てうどゞも古代になれたるをば……かろ／＼しき人の家のかざりとはなさじと（十帖源氏）
- ・父宮の御あとをかる／＼しき人には渡すまじとて、御調度どもも明暮かたみとながめ給へり。（おさな源氏）

「うるはし」の語は用いないが、原文の表現に沿ったものとなっている。

2 いみじき野ら藪なれども、さすがに寢殿の内ばかりはありし御しつらひ変らず、つややかに掻い掃きなどする人もなし、塵は積もれど、紛るることなきうるはしき御住まひにて明かし暮らしたまふ。(同、二一・330)

1 に続いて、荒れた家ではあつても、室内には普通りに調度類をきちんと置いて暮らしていることが語られる。この「御しつらひ」は1の「御調度」よりも大きなものであろう。普通りの生活様式は、塵の積もる中ではいかにも不似合いであるが、「高貴な家門に生まれた誇り高き身の、それしかない自然な生き方（『新編』頭注）」であり、それを端的に表わしているのが「うるはし」の一語である。

梗概書はいずれもこの部分に触れていない。

3・4 古りにたる御厨子あけて、唐守、藐姑射の刀自、かぐや姫の物語の絵に描きたるをぞ時々のみさぐりものにしたまふ。古歌とても、をかしきやうに選り出で、題をも、よみ人をもあらはし心得たるこそ見どころもありけれ、うるはしき紙屋紙、陸奥国紙などのふくだめたるに、古言どもの目馴れたるなどはいとすさまじげなるを、せめてながめたまふをりをりは、引きひろげたまふ。今の世の人のすめる経うち誦み、行ひなどいふことはいと恥づかしくしたまひて、見たてまつる人もなければ、数珠など取り寄せたまはず。かやうにうるはしくぞものしたまひける。(同、二一・331)

つれづれを慰めるものとして末摘花が手にする物語のいできはじめの祖『竹取物語』の他、散佚物語の藐姑射の

刀自、唐守などが古いものであろうとされているのは一つには末摘花の愛読書だったからである。ありふれた古歌を書いてある紙も薄様ではなく、官製紙の紙屋紙、陸奥国紙であって、和歌を書くには適さない。が、この紙屋紙は「常陸の親王の書きおきたまへりける紙屋紙の草子（玉鬘、三・138）」としても出て来る。その草子は歌学書である。古風な、王氏の流儀でもあろうが、時代の好尚とは合わない。^(注10) それらを所持しており、「うるはし」と殊更に形容されることで、時代との落差が際立つ。そして、その暮らしぶりが再び「うるはし」の語を以て締め括られる。

梗概書でこの部分に触れるのは『十帖源氏』のみである。

・ふりにたるみづしあけて、からもり、はこやとじ、かくや姫の物がたりの絵にかきたるを時くのまさぐり物にし給ふ。

紙屋紙もなく、「うるはし」の語も用いないが、1、2と同様原文の表現に沿った書き方となっており、具体的な物語名があげられている。

5 御使の祿、心々なるに、末摘、東の院におはすれば、いますこしさし離れ、艶なるべきを、うるはしくものしたまふ人にて、あるべきことは違へたまはず、山吹の桂の袖口いたくすすけたるを、うつほにてうちかけたまへり。（玉鬘、三・137）

新年のための衣装配りの箇所、六条院から離れ、従って源氏との関係もそれだけ離れている人々は、使者への祿にもそれなりの対応が求められる。それをやはり格式を守って作法通行行なう末摘花の態度が「うるはし」とされ

る。もとより禄にふさわしい衣装のある筈もなく、「いたくすすけたる」ものをかづけるしかない。こゝでも「うるはし」とあることで格式と実状との落差が示されている。

『源氏小鏡』『源氏物語忍草』以外はこの部分について触れているが、「すすけたる」ことと和歌だけが述べられる。

6・7 東の院の人々も、かかる御いそぎは聞きたまうけれども、とぶらひきこえたまふべき数ならねば、ただ聞き過ぐしたるに、常陸の宮の御方、あやしうものうるはしう、さるべきことをり過ぐさぬ古代の御心に、いかでかこの御いそぎをよそのこととは聞き過ぐさむと思して、型のごとなむし出でたまうける。あはれなる御心ざしなりかし。青鈍の細長一襲、落栗とかや、何とかや、昔の人のめでたうしける袷の袴一具、紫のしらきり見ゆる霰地の御小桂と、よき衣箱に入れて、つつみいとうるはしうて奉れたまへり。(行幸、三・

314)

玉鬘の裳着の祝いが方々から届く。大宮、秋好中宮、六条院の女性たちの贈り物は裳唐衣や装束、扇、化粧道具、香などだが、二条東院の人々は5の場合同様に控えるべきなのだという。しかし、末摘花はそうしない。その贈り物が細かに語られる。青鈍は喪服ではないにしても、空蟬のような尼に贈る(玉鬘巻)にふさわしい。無神経(『新編』頭注)なのでなく、或いは何か根拠があったにせよ、ここでは祝いの品らしくないものとされている。また、「落栗とかや、何とかや」と揶揄的に語られる流行遅れの品も贈るには適さないものである。それに気付かず、作法を守っているところが「うるはし」とされるのはいうまでもないが、その贈り方もまた「うるはし」い。末摘花の贈り物は「よき衣箱に入れて、つつみいとうるはしうし」て届けられた。『源氏物語』の中で贈り物の箱が語られる例は多くはない。北山僧都が源氏に贈った金剛子の数珠は百済渡来の箱に入れられた(若紫巻)。朱雀院が齋宮女御

に贈った絵（絵合巻）、薫物合のために朝顔姫君が贈った香（梅枝巻）、明石姫君入内にあたり草子を贈った螢兵部卿宮への返礼の唐の本（同）、夕霧主催四十賀で源氏から太政大臣への贈り物（若菜上巻）の箱、これらはみな沈、紫檀といった素材で作られている。薫が中君に贈った衣装が「御料のは、忍びやかなれど、箱にて、つつみもことなり（宿木、五・440）」とされるのは贈り物の格の高さを示しているのである。これらの用例からすると箱に入った贈り物は立派なものとしてされているようである。末摘花の最初の贈り物は新年用の装束で、「つつみに衣箱の重りかに古代なる（末摘花、一・299）」と、こゝでも箱、包みが出て来る。贈り物の箱が殊更語られるのは末摘花の格式を表わしているのだといえよう。それが「うるはし」とされる所以だが、同時に箱の中身との落差も示していること、これまでと同様である。

この部分は梗概書の多くが採り上げる。

- ・蓬生の宮に聞き給ひて、かたのごとく、おちぐり色のきぬなんど、むかしものにてふるめかしきを奉りたまへり。（源氏大鏡）
- ・末摘の君は例の出過人にて、ふるめきたる御衣なと色くをくり給とて、……もとより手跡あしきに……源このうたを見給ひ、おかしかり（源氏物語提要）
- ・すゑつむよりあをにびのほそなが一かさね、おちぐりのはかま、むらさきのしらぎり見ゆる、あられぢのこうちき、衣ばこに入て、御文に……源れいのおおしくおぼし（十帖源氏）
- ・末つむより青にひのほそなが一かさね、おちぐりのはかま、むらさきのしらぎり見ゆるあられぢのこうちきころもばこに入れて……おとれいのをかしくて、（おさな源氏）
- ・末つむ花より小袖を送り給ふと……身の卑下しては居給はで、いらざる事をと源は御顔赤く成りて見給ふ。

中略部分は「からころも」の歌の部分である。原文自体が細かに語っているから、梗概書も筆を費やすのであろうが、その扱い方には二通りあるのがわかる。『源氏物語提要』は「例の出過人にて」と説明を加え、『源氏物語忍草』は「身の卑下しては居給はで」「いらざる事を」と付け加えるが、贈り物の内容については簡略である。『十帖源氏』『おさな源氏』は装束を詳しく記し、箱をも省略しない。「うるはし」の語は用いないが、結果的に末摘花の「うるはし」さを写し出している。『源氏大鏡』は原文の表現に沿ってはいるが、詳しいものではない。

「うるはし」は、『源氏物語』にあつては先に述べたように、儀式や上流の人々に係わつて用いられ、それが本来であつたかもしれない。仏に関しての例(螢巻)もある。その語を末摘花に関して用いていることに改めて注意したい。末摘花とは語り方が異なるけれども、宇治八宮の例も似ている。八宮は家に伝わる宝物も母方の祖父の遺産も失い、ただ「御調度などばかりなん、わざとうるはしくて多かりける。(橋姫、五・124)」のであつた。末摘花の「うるはし」は他の人物と違つてすべて語り手による評価である。この「うるはし」がなければ、末摘花は時代遅れでセンスのない醜女でしかなく、それは語り手以外の作中人物による評価でもある。「うるはし」という語は融通がきかないという以上に格式の高さを保証しているのである。「うるはし」の意味の幅よりも共通するところがこの場合は認められるのではないか。

このような「うるはし」を梗概書は認めていたのだろうか。梗概書の縮小の仕方を見たとき、『十帖源氏』『おさな源氏』だけが、「うるはし」さを捉えていたようにみえる。梗概書は原作から取捨選択し、言い換え、また説明を附加する。以上に見た範囲では両書を著した野々口立圃が意識していたかはともかく、説明を加えない分、「うるはし」を残すことになつた。

他の梗概書で「うるはし」の語を用いるものが、皆無なものではない。広島大学蔵佚名梗概書は行幸巻に「例の末つむ花、うるはしうさるへきおりすくきぬ御心にて」とする。注のための本文抄出が結果的に梗概書となる（同解題）という性格が「うるはし」を残したかもしれないが、贈り物の内容については簡略である。^(注11) 梗概書の依拠本文、和歌の取り扱いに関しては従来も論ぜられているが、このような細部に目を向けることも必要であろう。『源氏小鏡』の「うるはし」さに関する記事の少なさは、長さだけでなく、連歌制作という目的と係わる。「よもきふにはむねとむちとかさとあれたるやときつねなと付べし」とあるように、連歌付合のためには具体的な物を示す語、『源氏物語』であるとする語が必要だったのでないか。この「うるはし」は和歌的ではないから、和歌を中心とする梗概書も採られにくかったのだといえる。^(注12) 記事の選択は梗概書がどのような場と隣り合っているかに係わるものと思われる。

5

古注釈で末摘花の「うるはし」に言及するのは恐らくは『細流抄』が最初である。『細流抄』は蓬生巻、前掲4の部分について、「是まで常陸宮の行跡をいへり。上臈しきさま也」とし、これは以後の注釈の幾つかに受け継がれてゆく。「是まで上臈めきたる体にや」とする『紹巴抄』、「いかほども上臈しき事をいふ也」とする『覚勝院抄』の他、『岷江入楚』は「末摘の古躰なるさまをいひつゝけたる結語也」とし、続けて『細流抄』説を引く。『万水一露』『首書源氏物語』『湖月抄』もまた同説を引いている。^(注13)

三条西実隆は宗祇から源氏講釈を受け、自身も講釈をした。それらの中で末摘花の「うるはし」はどのような扱われたのだろうか。文明十七年（一四八五）閏三月、宗祇、肖柏を自邸に迎えての講釈は「読む」とあり、そのス

ピードと宗祇の徳大寺邸での講釈が「講ず」とあることなどから解釈上問題になっている点などだけをおさえ、ざつと読解していったものかともいわれる。^(注14)『嵯峨の通ひ』に通ずるかともみられるが、『実隆公記』によれば、文明十年八月六月まで続いたこの「講釈」は宗祇による場合と肖柏による場合があり、若菜上下巻、浮舟巻以降は宗祇がある程度の日数をかけて「講釈」している。蓬生巻の場合は肖柏が「読」み、宗祇が同席している（五月二十八日）。巻により違いがあろう。この講釈の内容はわからないが、宗祇・肖柏・実隆が係わる『源氏物語聞書』、『弄花抄』には先の『細流抄』説は見られない。そして実隆による講釈は対象者が武士にも拡がっている。^(注15) 応仁・文明の乱を経て公家の窮乏する中、一度ならず秘蔵の源氏写本を売るような経験もした実隆が、都の公家文化を求める地方武士たちに講釈することを考えると、「上臈しきさま也」には興味深いものがあるが、この注の性格をいうのはなお慎重でなければならぬ。以後の注からすれば三条西家の説と見てよいと思われるが、この注は少なくとも和歌的な関心からは生まれまいとはいえよう。「女の御心をやるもの（『三宝絵』）」であった物語が「源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり」となるまでに、何があつたか。「六百番歌合」の俊成の言はあくまでも和歌のためであつて、物語自身^(注16)の地位を高めるといふものではないとの説が出されているが、後代、二条良基は『愚問賢注』で「六百番判詞に、俊成卿の、源氏見ざらむ歌よみは口惜事と申されき。しからば源氏の詞など幽玄ならんをば、本歌にはとるべきをや」とこのことばの意味を問い、やがて源氏、伊勢物語、勅撰集を重んずる『筑波問答』を経て、『九州問答』では「源氏寄合ハ第一事也」とも述べる。^(注17)『源氏小鏡』が彼の周辺で成つたのなら、「うるはし」はやはり和歌、連歌の関心とは違うことを示すといえよう。

『細流抄』を承ける古注釈の一、『万水一露』が松永貞徳の跋を付して刊行されたのは、承応元（一六四八）年頃、それと前後して、山本春正画・跋『源氏物語』（慶安三跋）、『首書源氏物語』（寛永一七成立、寛文一三〇一六七三刊）、『湖月抄』（延宝三〇一六七五）が刊行され、『十帖源氏』（承応三年頃成立、万治四〇一六六一刊）、『おさな源

氏』（寛文一以前成立、同五年刊）が刊行された時期も近い。それぞれ版を重ねた。江戸時代、源氏全文を印刷した版本は『万水一露』以下の四書に限られるが、異版を作るにはあまりにも大部なので近世中・後期以降は梗概書・入門書が主流になるのだという。^{（注18）} 出版上の問題は近世梗概書が中世のものとは異なる性格を持つことを意味するだろうが、中世梗概書もまた、絵を加えて出版されている。その中で野々口立圃の二書が末摘花の「うるはし」ぶりを書き取ったことはどう考えられるだろうか。立圃が、『万水一露』に跋を付して出版した貞徳のもとを離れたのは二書を草するよりも前のことだが、或いはそれ以前に貞徳の古典講義や若い頃に学んだ和学など、どこかで「うるはし」に接していたかもしれない。

以上のことは読書の形態というよりは、作品の評価に係わる問題かもしれない。だが、評価も特定の状況と係わつてなされる。各注釈も梗概書もその目的、対象者を異にしており、「うるはし」が残されるか否かはそれらと無関係ではないのではないか。また、その成立の場・状況には「読む」読書が関係することも多い。事情は違ふとしても、『おさな源氏』序に「ある女房の長々しき草紙をよみけるを、わらはべ共のこぞりよりて聞きるけるが」と「読む」ことが記されているのも興味深い。

一つの語、或いはそれにつながるものから見えて来るものもあるだろう。現在に至るまで、変形、時に誤解・曲解を生みながらどの時代もさまざまな形態で『源氏物語』は読まれている。最近ではそれらのあるものが、電子出版物、インターネットという新しい形態で提供されたりしている。『源氏物語』がどのような形態で読まれて来たか、その形態を生み出したのは何であったか、そこから何が見えて来るのか。読書史としてそれを考えてみたい。本稿はそのための覚書である。

注1 その他にも『明月記』嘉禄元(一二二五)年二月十六日の記事(国書刊行会本による)は、「家中小女等」に源氏五十四帖を写させたと記す後で「建久之比被盜失了」と三十年ほど家本を失っていたことを述べる。

2 新編日本古典文学全集による。数字はページ数。

3 講談社学術文庫本のページ数。

4 文明六年に始まる現存『実隆公記』で「初音巻覧之」と最初に記されるのは文明七年、以後毎年ではないが、この「嘉例」が見える。同時に「読最勝王経(大永四年)」のように「読」むものもある。正月二日の記事は早く三谷栄一氏『日本文学の民俗学的研究』(一九六〇、有精堂)に指摘があるが、「覧」ることについては問題にされていない。

5 伊東祐子氏「物語文学史考―絵物語をめぐって―」(『中古文学』64、一九九九・11)

6 神谷かをる氏「平安時代言語生活からみた歌と物語」(『国語国文』一九七六・4)。明治初期でも黙読は少なかったとする前田愛氏「音読から黙読へ」(『国語と国文学』一九六二・六)を論拠としている。物語音読論に言及することは黙読に言及することになるが、物語黙読の意味という角度から論じたものに西郷信綱氏「源氏物語を読むために」(一九八三、平凡社)がある。

7 濱口博章氏「飛鳥井雅有日記注釈」(一九九〇、桜楓社)のページ数。今井源衛氏「源氏物語の研究」(一九六二、未来社)は「源氏読み」について述べる中でこの例をもあげている。

8 藤原克己氏「古風なる人々」(『むらさき』16、一九七九・12)は、「撰閲制の進展に伴う律令制身分秩序の崩壊動揺過程」にあつて、「宮家の人々が古風な格式を守って生きてゆくその「うるはしき」が、そのまま「かたくなしき」になりかねない実情」があつたとする。また、早く犬塚旦氏「平安朝における「うるはし」の展開」(『王朝美的語詞の研究』、一九七三、笠間書院、初出一九五六)も未摘花に注目している。

9 新編日本古典文学全集による。数字は巻数・ページ数。

10 紙屋院で作られる紙屋紙が専ら漉き返しの粗末な宿紙となったのは平安末期からとされている。また、この物語の他の用例から見ても上質の紙であると見た方がよいだろう。尾崎左永子氏『源氏の恋文』(一九八四、求龍堂)は蓬生、絵合、梅枝、鈴虫等の例により、格の高い紙だが、手紙用に用いられていないところから、かなり厚様のかたい感じのものであったのかもしれないとする。和紙に関する研究としてまずあげられる寿岳文章氏『日本の紙』(一九六七、吉川弘文館他)や町田誠之氏『和紙の風土』(一九八一、髪々堂出版)は、紙屋紙が王朝貴族に好まれたことを述べ、蓬生巻をもその根拠にしているが、「うるはし」は無論

- 単純にとることはできない。陸奥国紙も得て「うれしきもの」（『枕草子』）であり、古くなっているとはいえず、上質には違いない。
- 11 翻刻平安文学資料稿『佚名源氏物語梗概書（広島大学蔵）中』（二〇〇〇）、広島平安文学研究会による。解題は下巻。
- 12 『山頂湖面抄』は行幸巻の「からころも」の歌についても述べない。今井源衛・古野優子氏『山頂湖面抄諸本集成』（一九九九、笠間書院）による。
- 13 『紹巴抄』は平安文学資料稿、『覚勝院抄』は『源氏物語聞書 覚勝院抄』（汲古書院）、『首書源氏物語』は和泉書院刊影印本、『湖月抄』が講談社学術文庫本による。他は源氏物語古注集成による。
- 14 芳賀幸四郎氏『三条西実隆（人物叢書）』（一九六〇、吉川弘文館）。伊井春樹氏『源氏物語注釈史の研究』（一九八〇、桜楓社）、宮川葉子氏『三条西実隆と古典学』（一九九五、風間書房）にも言及がある。
- 15 高橋伸幸氏の数えるところ（『三条西実隆—中央と地方との文化交流』、『解釈と鑑賞』一九九二・三）によれば、実隆四十代から五十代の和学講釈の約四割が、幕臣・守護やその被官の要請によるものであるという。
- 16 松村雄二氏『源氏物語』と源氏取り―「源氏見ざる歌よみは遺恨の事」前後―（『源氏物語批評集成14・源氏物語享受史』、二〇〇〇、風間書房）
- 17 『愚問賢注』は日本歌学大系、『九州問答』は古典文庫『良基連歌論集三』による。
- 18 清水婦久子氏『絵入源氏桐壺巻』（一九九三、おうふう）解説。

付記 本稿は福岡女学院大学公開講演会での講演「『源氏物語』・読書の歴史」（二〇〇〇・一〇・七、於あいれふ、福岡市）をもとに加筆修正したものである。